私の心配

2025/8/17
西九州伝道所
佐々木正明

子供のころ、学校図書室の科学雑誌を読むのが好きだった私は、まだ電気が通っていない辺鄙な里で、宵の明星を見つめているうちに、漠然とした恐怖に駆られたことがあります。「あの星が落っこちてきて、地球にぶつかったらどうなるのだろう・・・・。」

８１歳を迎えようとしている今は、まったく異なった次元での話ですが、それと同じような恐怖を感じることがあります。「私たちの教会が、イエス様に排除されてしまったら、どうなるのだろう・・・・。」

笑われるかもしれませんが、本当の所、恐怖です。イエス様は突然、それまで誰一人として触れたことがない問題を取り上げ、かなりしつこく語り始められました。しもべたちに仕事を預けて旅に出た主人が、しもべたちが怠惰に過ごして、やるべき仕事を放りだしたままにしているのに激怒し、しもべたちを追い出し、新しい人々にその仕事をお委ねになったという譬え話・・・皆様も思い出すことが出来ますね。

これは神様に選び出され、非常に大切な使命を与えられたイスラエル民族が、与えられた使命を軽んじ、まったく果たそうとしなかったことを責め、神様がその使命をイスラエル民族から取り上げ、他の民族にお与えになるという、危機的な預言に他なりませんでした。そしてまた、神殿が破壊されつくし、イスラエル民族が国を失うことも、関連するできごととして予言しておられました。

イスラエル民族の崩壊は、紀元７０年に、イエス様がお語りになった通りに、現実のものとして起こりました。ローマの鉄の爪に歯向かったイスラエルは、ローマの将軍タイトスによって（後に皇帝）完全に滅ぼされ、神殿も見る影もなく壊されてしまったのです。

この時から、かつては神に選ばれた誇り高き民イスラエル民族は、国家を持たない流浪の民となり、１９４８年に現代イスラエル国家の成立が宣言するまで、１９００年近くも、あらゆる困難と辛酸と悲哀を味わう、大変な困難な歴史を積み重ねてきたのです。神様はこのイスラエル民族を完全に見捨てられることはなく、再び国家として甦ることが、聖書には明確に語られていますが、現代のイスラエル国家が、その復活を予言された国家であるかどうかは、まだはなはだ疑問です。大きな変革が必要とされているようです。

現在私たちの仲間の教会の中には、なんの疑問もなく、現代イスラエル国家が、神様によって回復された国だと信じ、イスラエルのやっていることをすべて容認し、イスラエルを声援し、イスラエルのために祈ろうなどと、声高に語っている人たち沢山いますが、もう少し注意深く、冷静に見ていく必要があると思います。

ところで、牧師が密に恐れているのは、そのイスラエルのことではありません。排除されたイスラエル民族に代わって建てられた、新しい神の民、すなわち、イエス様ご自身が「私が建てる」とおっしゃった教会という神の民が、排除されて、与えられていた仕事は、他の人たちに任せられるようになるのではないかと、感じるからです。

神の民であったイスラエルは、神様から与えられた使命を軽んじ、忘れ去り、傲慢になって、完全に神様の目的から外れてしまいました。排除されても仕方がなかったほど、腐敗していたのです。

ところで、イエス様ご自身によって建てられ、新しく使命を与えられた教会は、どうでしょう？　与えられた使命を忘れずに、忠実に遂行して来たでしょうか。キリスト教会の歴史を見ると、正直、イスラエル民族よりも惨めな状態です。イエス様が命を賭けてお教えになり、お与えになった使命、イスラエルから取り上げられ、教会に与えられた使命は、2000年にわたっておざなりにされ、ないがしろにされて来ました。

教会は、イエス様が命を捨ててまで開いて下さった救いの道を軽んじ、宣教の業を忘れ果て、人種差別、植民地政策、奴隷政策に奔走し、教会裁判、魔女狩り、教会間の戦争、資本主義との癒着、などで腐り果て、イエス様の教えとは全く異なった、人権を軽んじ、神様に似せて造られた人間を無視したことを、やり続けて来ました。教会が、平和を造ったことなどあるでしょうか。教会が、貧しく虐げられた人々を救うために、どれだけのことをしたでしょう？　教会は、人権を軽んじられた人々の、味方になって来たでしょうか？　イエス様の愛の精神は、教会では忘れ去られて来ました。それは牧師がしばしば指摘してきたとおりです。白人たちが自分たちの都合に合わせて造りあげた、キリスト教という宗教ほど、人類を苦しめ続けた宗教は他にありません。

そして、現在でも、キリスト教はイエス様の精神を理解せず、その教えを捻じ曲げ、自分勝手なことに奔走しています。白人たちが造りあげた西欧キリスト教は、聖書の教えにも、イエス様の教えにも背を向けた宗教です。ですから牧師はキリスト教を止めたと宣言し、キリスト教の教えではなく、イエス様の教え、聖書の教えに忠実な人間になろうと、訴え続けているのです。

現代キリスト教の最大の間違い、あらゆる間違いの元となっている基本的間違いは、自分たちがイスラエル民族の代わりに立てられた選びの民であると理解し、イスラエル民族族に与えられた使命だけではなく、祝福も権威も、教えも、律法も、すべて自分たちに与えられたと理解したことです。（置換神学）　つまり、教会は旧約聖書も自分たちに与えられたものだと考え、旧約聖書に記されている律法も自分たちに与えられたものだと理解し、神様の律法を自分たちの手に取り、誇り高く暴走してしまい、すべての民族たちを救いに導くどころか、まさに、滅ぼし尽くす民になってしまったのです。

それは千年以上も前のキリスト教の話ではありません。社会情勢が変わり、国家観も変わり、政治思想

も変化し、民主主義が広まっていますが、現代ほど、富の偏重が厳しくなり、大勢の貧しい人々が苦しんでいる世界は、かつてありませんでした。端的に言って、西欧の白人たちの自分勝手な宗教観が、金と権力をかさに着て、自分たちに都合が良い法律を作り上げ、法的には正当な富を築き、貧しい人々を増やし続けているのです。

もう30年ほども昔のことですが、私は JEA（日本福音同盟）の二人の代表の内のひとりとして、カナダのバンクーバーで開かれた、国際宣教会議のようなものに参加したことがありました。これは福音主義の団体が催したものらしく、各地で働く宣教師たちや、それぞれの国を代表する伝道者たちが、2～300百人集まっていました。掛け声は、「グローバル化の波に乗って、宣教を拡大しよう」というようなものだったと思います。

全体会議で、すべての参加者が一堂に集まった時間に、数人の講演者たち（すべて白人）は、基本的にグローバル化を単なり社会の動きとしてとらえ、そこに倫理的な背景、あるいは内包する道徳的な問題には無頓着で、グローバル化を積極的に捉え、宣教を躍進させようというような、講演をおこなっていました。全体のディスカッションの時間になり、数人の人たちが、講演者の意見に賛成して、みんなで頑張ろう、神様の祝福を信じて乗り出そうというようなことを言っていました。私は世界で最も宣教が困難と言われる日本の代表として、このような会議の流れにとうとう我慢が出来なくなり、よせばいいのに、発言してしまいました。

私は他の人たちとは全く違い、グローバル化を裕福な国々の世界侵略と捕え、留まることを知らない資本主義の経済侵略と見做し、かつての植民地主義と変わらない精神のもとにあると、断罪したのです。現代のグローバリズムは、富める国々が自分たちに都合よく作り出した法律に従って、合法的に作り出した現代の植民地政策に過ぎないと語ったのです。私たちはそのような社会の中にあっても、福音を宣べ伝えるが、そのような社会を推進したり、認めたり、その波に乗ったりしてはいけないと、警告したのです。

会議は冷や水を浴びせられたような格好になりましたが、ファシリエーターが何とか、取りまとめてくれました。白人宣教師たちの間には、こんなことを言う奴がいると、驚きが広がったようです。唯一、どこかの国で人権団体で仕事をしているという女性が、私の見解も非常に大切であり、その声に耳を傾けるべだと、発言してくれたことを覚えています。

ただ、会議の後には、多くの発展途上国の代表者たちが私に声をかけ、あのように言ってくださってありがとうと言ってくれました。私が、どうしてあなた方は発言しなかったのですかと問い詰めると、自分たちは貧しくて、この会議に参加するのさえ、必用経費のすべてを、宣教師たちに出してもらったから参加できたのであって、とても反対するようなことはできないとのことでした。私は暗澹たる気持ちに落ち込んでしまいました。

白人たちが中心となって作りあげた西欧の国々は、つい最近も、こぞってその知識と力を用いて、さらに金儲けの悪だくみを作り上げました。地球温暖化などという問題を、CO2などと絡み合わせ、環境問題提唱者たちを味方に抱えて、日本の自動車産業を崩壊させようと企てたのです。10 年ほど後には EV に完全移行する法律を作り出したりもしたました。これは、西側諸国・・・・いわばキリスト教主義諸国の身勝手な悪だくみでした。でもこれが中国、これも身勝手な参入を誘発し、まったくの失敗に帰したのは、皆さんもよくご存じのことと思います。

アメリカとイギリスによって広められた日本のキリスト教も、今その偽りの仮面を剥がされています。イギリスやアメリカが、人類史上で、どれだけ人間の幸せに貢献してきましたか？ イギリスは世界中で植民地を作り、有色人種の人間性までも否定し、数百年にもわたって搾取し続けてきました。イギリスがアメリカの独立と日本との戦争（第二次大戦の一部として）によって、植民地の大部分を失ってからは、アメリカが代わって大国になりました。今のアメリカの身勝手な経済政策は、キリスト教を名乗る人々の国家が、良心の呵責を感じないままにやり続けていることなのです。

神様の姿に似せて造られた、人間の本源的な姿を最もよく留めている日本人には、キリスト教という宗教の欺瞞が良く見えるのです。ですから日本のキリスト教の勢力は、これからますます弱小化していくことでしょう。これが見えていないのは、西欧キリスト教の汚い教えに洗脳されてしまった、クリスチャンと言う人々です。

今は太平洋戦争後、65年間か70年間、極秘とされて来た戦争を含む、アメリカ政府の文書が開示され、日本がアメリカ政府の策略に乗って、真珠湾奇襲に打って出ざるを得なくなったということも、アメリカが古い日本の暗号をすべて解読し、日本のあらゆる軍事行動を予測し、真珠湾攻撃を、胸躍らせて待ち続けていたことも、白日の下に晒されています。

もともとアメリカは、オレンジ作戦なるものをもって日本を敵国と想定して、戦略を練っていたことも、ソ連と手を組んで、日本侵略も考慮し、数十万人の非戦闘員の犠牲者を出した無差別爆撃も、広島や長崎の原爆投下も、あらかじめ計画されていたことが、明らかになっています。ソ連の終戦前の日本に対する宣戦布告と北海道への攻撃も、初めから話し合われていたことでした。実際アメリカは、ソ連兵の訓練を買って出ていますし、北海道攻撃の為には、およそ100隻に及ぶ、アメリカの軍用船舶が貸し出されていました。

更に言えば、アメリカは戦争のさらなる長期化を想定し、「Operation Downfall」という大規模な日本侵略の計画も立てていました。その計画には二つの具体案が含まれ、一つは「Operation Olympic」と名付けられ、1945に九州南部に上陸する作戦でした。もう一つは「Operation Coronet」と名付けられ、1946年に関東平野に本格的上陸を決行する予定でした。ただ、日本が彼らからっすると意外に早く、無条件降伏をしてしまったために、これらの計画は御流れになり、あまり知られることもなくなったのです。

そのような好戦的な精神が戦後も引き継がれ、マッカーサーの GHQ の作戦でも実行されたことが、今や開示された資料や、日本の記録でも明白です。マッカーサーは悪名高い東京裁判も実施しました。多くの無罪の日本人が処刑されました。それはもはや公の事実です。次々と資料が出てくるのです。

さらにマッカーサーは War Guile Information Program を遂行し、7769冊の日本の書籍焚書処分にしました。日本人が日本人としての誇りを失い、永久に戦犯意識を持ち続け（自虐史観と呼ぶ）、二度と西欧諸国、特にアメリカには歯向かえない、精神状態を作り出すためです。しかし、今やその焚書処分を免れた文書が、次々と復刻版として世に出されています。日本人を自虐史観に閉じ込めようという策略は多くの分野におよび、今もその影響は残り続けています。

マッカーサーは、日本をキリスト教化しようとさえ試みて3千人の宣教師を招き、1千万冊に及ぶ聖書分冊を配布しているそうです。このような事実は、今や多くの日本人に知られるようになり、ますます、キリスト教に対する日本人の目は厳しくなり、結果として宣教を困難なものにしています。

牧師は恐れています。このような歴史の後ろ盾となって来たキリスト教会は、イエス様に見捨てられ、その使命は、「他の民」に与えられてしまうのではないかと。教会の惨憺たるありさまは、イスラエルが陥った惨状よりも、もっと深刻です。教会は世界中の人々を苦しめてきました。世界中の人々の助けになるようなことは、何か一つでも、やったことがあるでしょうか。

でも、このような牧師の恐れには、宵の明星が地球に落下してくるなどという、荒唐無稽で根拠のないものではありません。実は、聖書に根拠があるのです。ローマ書の11章に記されているパウロの教えです。パウロはオリーブの木に接ぎ木された、野生のオリーブの枝の話をしていますが、元々のオリーブの木はイスラエルのことです。接ぎ木された野生のオリーブの枝とは、異邦人が中心となった教会のことです。そしてパウロは、野生のオリーブの枝が取り除かれる可能性を、むしろ大いにあり得ることとして語っています。パウロの言葉は、単に彼の言葉ではなく、霊感を受けて書いた言葉です。教会が神の救いの働きから、排除される可能性があるのです。

教会が排除された後、救いの伝達者の使命は誰に与えられるのかは、明らかではありません。もともとのイスラエルに返される可能性もあると思います。でもそれが現在のイスラエル国家だとは思えません。教会の腐敗は、もう頂点に達しています。この切羽詰まった状況に、神は、他の民を起こされることも、考えられないことではありません。私たちに、今、なにができるでしょうか？　聖書が教える教え、イエス様が教えた教えを、忠実に守り、それを教え伝えて行くことです。教会に警告を与え、悔い改めを迫り、本当に聖書的な教会に立ち返ることです

不忠実な民イスラエルにも、僅かながら忠実な人々がいたように、現代の教会の中にも、忠実な人々が

います。私たちも、忠実な神の民の一人として、残り続け、活動し続けたいものです。